

生活と地殻を結ぶ試み—生活環境形成過程の研究—

岡田 悟

Satoru OKADA

1. はじめに：「山がある」

イギリス人登山家ジョージ・マロリーが「なぜエベレストを目指すのか」と問われて「そこに山があるから」と答えたというエピソードは有名だが、「なぜ山があるのか」と問われたら、何と答えたであろうか。「私の知ったことではない」という答であったかも知れない。

「なぜ山に住むのか、どのようにして山に住んでいるのか」という問題意識から、主に九州、四国、近畿地方における傾斜地の集落を対象に長年研究を進めて来た¹⁻³⁾。しかし、その蓄積から「なぜ山があるのか」という問いが存在する可能性に気付いたのはごく最近のことである。

「なぜ、どのようにして山に住んでいるのか」という問題意識には、以下のような背景がある。人間は自然界に働きかけ、価値あるものを生み出し、豊かさを享受して生活を営んできた。最近では情報化社会を反映した第3次産業が、その前は製造業に代表される第2次産業が富を産み出した。産業革命以前の第1次産業を中心とした日本の近世では、水田で生産される米が豊かさの象徴であった。しかし、水田耕作を安定的に行うには灌漑施設の完備や治安の保証が必要であり、それらが期待できない中世以前は平地よりは山に働きかけて生産や生活を行う方が有利であり、「山に住む」ことに生活環境形成の原点が見出されると考えられる。現人類が誕生したのは今から約400万年前と言われるが、現人類に最も近いオランウータン、チンパンジー等の類人猿が生息していた場所は森林であり、現人類の故郷もやはり森林ではなかったか。

各地の傾斜地集落を事例として研究する場合、大まかに言えば、自然、産業、生活の3要素に着目するが、多くの事例を対象とする中で、地理的に大きく離れた場所でこれら3要素の在りようが酷似することに気付いた。特に自然要素の中で地質、地形が他の2要素を大きく規定し、多くの共通点を産み出している可能性が高い。従って、その場所に限った地質、地形に留まらず、約1億年前に形成され広範囲に地質、地形を規定する地殻が生活に深く関連しているのではないかという仮説が成り立つ。

従来、地殻と地質、地形との関係を考察する学問は存在し、一方、地質、地形と産業、生活との相互関係を考察する学問も存在していた。しかし、両者を結びつけ、「なぜ山があるのか」という素朴な疑問をスタートとして、地殻から生活まで、即ち、1億年前から人類誕生を経て現在までを一気に説明しようとする仮説は存在しなかった。本研究はこの仮説を実証するための第1歩である。今までの九州（五木、五家荘、椎葉）、四国（一字、馬路）、近畿地方（十津川）を対象とした生活空間、生活環境に関する研究成果¹⁻³⁾に地殻、地質、地形に関するデータを加えて分析、整理し、新たに四国（仁淀）、中部（上村）、関東地方（大滝）での事例を対象に加えて、計9地域で同様の

研究を行い、総合的に地殻から生活までの関係を探ることが本稿の主な内容である。

2. 傾斜地の生活空間、生活環境

本稿の2つのキーワード、生活と地殻の内、まず、生活は平易に言えば暮らし方であり、形として表すことが難しいものである。また、生活は自然環境、社会環境に関する多くの面と関連があり、少数の要素から生活の実態を描き出すことは難しい。こうした特徴を持つ生活を、できるだけ形に表し、かつ、多面性を失うことなく把握する方法のひとつとして、住宅とその集合体を対象として検討する方法が挙げられる。住宅は住む人とそれが行う生活行為の容器であり、住宅とそれらの集合体とが主に物理的な生活環境を形成している。こうした生活環境の変化は生活そのものが変容した結果であると考えられる。

住宅とその集合体の在りようは形として把握され易い。住宅で言えば、中門造り、曲がり家、くど造り、合掌造り、本棟造りといった分類で、また、集合体で言えば、散村、街村といった分類で理解されている。こうした住宅とその集合体をグルーピングするには、外観、素材、間取り等の要素から住宅や集合体を類型化し、それをもたらしした要因を検討するという方法が用いられる。

多くの場合、〇〇造り等と分類される住宅やその集合状況が分布する地域は、ひとつの閉じた曲線で囲むことができ、そうした類型が生じる原因として自然、産業、文化が挙げられる。例えば、中門造りは長野から北日本の日本海岸にかけての雪深い地域に見られ（自然）、曲がり家は東北の馬産地域に見られる（産業）。また、合掌造りを含めて富山の民家に立派な仏間が設けられるのはこの地域に強い勢力を持った浄土真宗の影響と考えられ、さらには、自然や産業が共通しても江戸時代の藩境を境に民家の間取りが大きく異なることが指摘されている⁴⁾（文化）

しかし、こうした日本全体に共通して見られる住宅とその集合体の姿と、本稿で採り上げる各地の傾斜地集落との間には大きな差が見られる。即ち、これらの傾斜地集落は広範囲に、しかも、相互に離れて分布しているため、ひとつの閉じた曲線で囲むことができない。そして、離れていながら、生活空間、生活環境には相互に類似する点が多いのである。

まず、本稿で対象とする9地域に便宜的にアルファベットを付して、A五木、B五家荘、C椎葉（九州地方）、D仁淀、E一字、F馬路（四国地方）、G十津川（近畿地方）、H上村（中部地方）、I大滝（関東地方）とし、表1を作成してその地域欄にこれら9地域を挙げた^{注1)}。

これら9地域の分布を地図1に示した（以降、本稿では地図1の範囲を便宜的に西日本と呼ぶ）。上述のように広範囲に、相互に離れて分布している状況が理解されよう。D仁淀の高杭、松尾集落（本稿では以後D仁淀〔高杭〕〔松尾〕という形で地域名と集落名を表記する）を写真1に、I大滝〔麻生〕〔栃本〕を写真2にそれぞれ示したが、直線で600kmも離れているとは思えない程、集落の景観が類似している。

次いで、生活空間、生活環境を見る指標として、A~Iの各地域内に傾斜地集落が存在するか否かを採り上げ、表1の傾斜地集落欄に示した。これを見ると、9地域の内、F馬路にのみ傾斜地集落が見出せず、他の8箇所と大きく異なっている。調査当時の事情を振り返ると、F馬路を対象と

表1 本稿で対象とした9地域の特徴

地域	生活空間		地すべり 地形	地質構造
	傾斜地 集落	一列型 平面		
A五木	○	○	○	秩父帯 / 四万十帯 / 仏像構造線
B五家荘	○	○	○	
C椎葉	○	○	○	
D仁淀	○	○	○	秩父帯
E一字	○	○	○	三波川帯 / 御荷鉾構造線 / 秩父帯
F馬路	×	×	×	四万十帯
G十津川	○	○	○	
H上村	○	○	○	中央構造線 / 御荷鉾構造線 / 仏像構造線 / 三波川帯 / 秩父帯 / 四万十帯 / 嶺家帯
I大滝	○	○	○	秩父帯 / 四万十帯 / 仏像構造線

○：存在する ×：存在しない

したのは、F馬路では藩政期の支配制度の点で四国山脈を隔てて反対側に位置するE一字に類似性があり、また、山間村の特徴を活かして現代社会に適応していく姿勢が注目されたからであった。

F馬路を除く8地域では、傾斜地であるため住宅敷地は等高線に沿った細長い形にならざるを得ない。D仁淀〔寺村〕の住宅敷地の様子を写真3に示したが、8地域に共通する住宅敷地内の建物の構成が理解されよう。また、9地域には多様な間取りの住宅が見られ、農家の間取りとして全国的に広く見られる広間型、田の字型の平面以外に、一列型と言うべき間取りが見出されるのが特徴であるが、やはりF馬路には一列型間取りの住宅は見られない。これを表1の一列型平面欄に示した。図1に8地域に見られた一列型間取りの住宅平面図の例を、地図1の分布に倣って描き、また、敷地配置図としてE一字、G十津川での例を描いた^{注2)}。図1、写真1~3から、傾斜地集落における生活空間、生活環境がイメージ出来よう。

3. 地殻、地質、地形

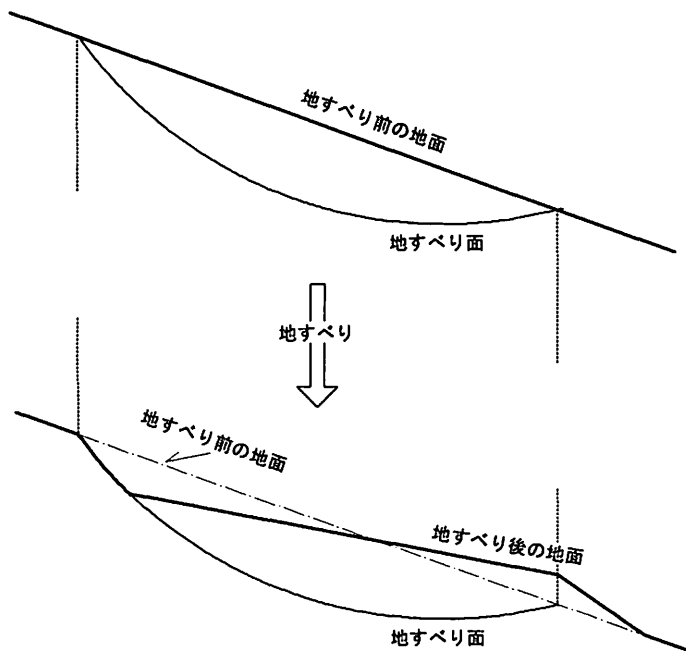
次いで、本稿のもうひとつのキーワード地殻について、現在までの地学の研究成果を援用して概説する。大まかに言って、地球は中心に核があり、その外側にマントルがあり、そして、最も外側

に地殻があるという構造を持っている。核はさらに内核と外核とに分かれ、内核は個体の金属、外核は液体の金属であり、マントルは高温で流動性の高い岩石で、非常にゆっくりと対流し、この動きがマントル対流と呼ばれている。地殻は岩石層で厚さが海洋で6 km程度、大陸で30~40 km程度である。地殻とマントルの外側部分とを合わせた海洋で100 km程度、大陸で120 km程度の層がプレートで、プレートテクトニクス、プレート境界型地震等の用語に用いられている。地球の半径約6400 kmの中では、極めて表面に近い所の現象である。

地球は10枚のプレートで覆われ、その内4枚が日本列島の周辺でぶつかり合っている。西日本(地図1)では、列島南側の海中でユーラシアプレートの下にフィリピン海プレートが潜り込んでいる。潜り込む時に海底の堆積物が剥ぎ取られる形で付加体が形成され、付加体はさらにユーラシアプレートの下で変成され、隆起して陸地を形成してきた。付加体はフィリピン海プレートが潜り込むのに伴って北から南に順に形成されるので、各付加体が順次北から南に、重なり合いながら並べられる形で日本列島が形成された。

ひとつかたまりのように見える日本列島は、付加体を起源とする多くの層から形成され、それぞれの層がモザイクのように日本列島を埋めている。これを地図に示したのが地質構造図で、地質は地面より下の岩石、地層の性質、状態等を指す言葉である。地表を見る限り変化がないように見えても、地質は違っている場合がある。既出の地質構造図^{9~13)}を基に西日本の地質構造図の概略を地図2に示した^{注3)}。西日本の地質は糸魚川静岡構造線で東西に、さらに中央構造線で南北に大きく区切られている。

図2 地すべり(断面図)



一方、山、平野等の地形は目で見て区別できる点で地質と異なっている。石灰岩の地質の所がカルスト地形となるように、地質が地形の直接的な原因である例が見られる。また、山は浸食され、川によって運搬、堆積されて平野となるように、浸食、堆積過程が地形として現れた例もある。関東平野等の日本の平野はこうして形成された沖積平野である。実際には山、平野といった広範囲なものから、扇状地、三角州、段丘、砂嘴等のより規模の小さいものまで、様々な地形が見られる。

地図2にA~Iの9地域を描き入れた。傾斜地集落が見られる8地域はいずれも中央構造線近くに位置する。さらに詳しく見ると、いずれも中央構造線の南側に位置している。中央構造線の南側は外帯と呼ばれ、北側の内帯と区別される。外帯は地図2に示すように北から南へ帯状に三波川帯、秩父帯、四万十帯からなる。各帯は先に述べた付加体の名残で、この順に形成され、帯相互の境界は御荷鉾（みかぶ）構造線、仏像構造線という断層を形成している。また、付加体の元となった海底堆積物の種類やその後の変成のされ方の違いによって性質が異なるため、各層がそれぞれ地質上の異なる特徴を持っている。三波川帯は強く変成された地層で破碎しやすい変成岩からなり、秩父帯は珊瑚礁や海底堆積物を主とする層で砂岩、頁岩、石灰岩等からなり、四万十帯は砂岩、頁岩が大部分を占める。

表1の地質構造欄に、各地域の地質構造の略図を示した。A~Hの9地域は地質上の形成順、即ち、三波川帯、秩父帯、四万十帯の順で、以下の5種類に分けられる。

- [1] 地域内を御荷鉾構造線が通過し、三波川帯、秩父帯とに分けられる：E 一字
- [2] 秩父帯の中にある：D 仁淀
- [3] 地域内を仏像構造線が通過し、秩父帯、四万十帯とに分けられる：A 五木、B 五家荘、C 椎葉、I 大滝
- [4] 四万十帯の中にある：F 馬路、G 十津川
- [5] 中央構造線内帯の領家帯、および、外帯の三波川帯、秩父帯、四万十帯が含まれ、中央構造線、御荷鉾構造線、仏像構造線のすべてが存在している：H 上村

9地域の地質はこのように多様であり、傾斜地集落が見られる8地域と、これらが見られないF馬路を含む他の地域との違いが生じる原因を地質の違いに求めることは難しい。特に、同じ四万十帯の中にありながら、傾斜地集落がG十津川で見られるのに対してF馬路では見られない。

4. 「地すべり」地形

写真4、5は共にD仁淀で写したものである。写真4は地域全体に地すべりへの対応を呼び掛ける看板、写真5はD仁淀〔大見槍〕における地すべりの危険性を示す掲示であるが、日々生活する中でここが地すべり地帯であると意識されていることが反映されている。D仁淀を含む四国の傾斜地集落が地すべり地形の所に多く存在していることが指摘されている¹⁴⁾。

土砂災害は大きく、地すべり、斜面崩壊、土石流に分類される。地すべりは斜面が深い位置から滑るように移動する現象である。斜面崩壊は表層の土砂や岩石が崩れ落ちる現象で、土砂崩れ、もしくは、崖崩れと言われるものである。土石流は山や谷の土砂が崩れて流れ落ちる現象である。

地すべりの様子を図2に断面図で示した。斜面崩壊、土石流は大雨、地震等の直接的な刺激によって起きる場合が多いが、地すべりは粘土等の滑り易い地層が地下水位の影響を受けることによって生じ、何らかの契機はあるものの、地下の地質構造に基づく慢性的な現象である。滑った地盤の上端部、下端部では斜面崩壊に類似した土砂の崩壊現象が見られるが、中央部はゆっくり滑るだけで目立った崩壊現象が見られない場合もある。規模の点では斜面崩壊が小規模、地すべりと土石流は大規模なものが多い。

地すべりが終わると図2に示すように、斜面上端部と下端部が急で中間部が緩やかな地すべり地形が形成される。写真5（左が北）に見られるD仁淀〔大見槍〕は、南から北（写真で右から左）に流れる徳光谷川の西岸の、西方が高く東方が低い傾斜地に位置するが、建物が描かれている集落部分に比して、その西側（集落上方）と東側（集落下方）で等高線が密に、即ち急斜面になっていることが分かり、地すべり地形に集落が作られたことが理解される。D仁淀〔潰溜（つえだまり）〕は同様の地形に位置し、その名の通り、斜面上端が「潰れる」（つえる）形、斜面下端が「溜まる」形の地すべり地形である。

地すべりは四国に限らず全国的に見られ、要因によって

1) 第三紀層地すべり

第三紀（6500万年前～165万年前）に堆積・形成された地層で、泥岩が多く水を含むと泥状となり、発生する

2) 破碎帯地すべり

断層などにより岩石が粉々になっている場所（破碎帯）で発生する

3) 温泉地すべり

温泉熱やガスの影響で地層が粘土状になったところで発生する。

の3種類に分類され^{14, 15)}、西日本のこれら3種類の地すべり地帯の分布を地図2に重ねて地図3に示した^{注4)}。第三紀層地すべり地帯は新潟から日本海沿いに九州の北半分に分布する。破碎帯地すべり地帯は中央構造線外帯の三波川帯、秩父帯に重なり、これらの帯のもろい地質が原因で、特に断層部分で顕著である。温泉地すべり地帯は九州や北海道の温泉地に散在する。従って、上述の[1]～[5]の内、[4]を除く[1][2][3][5]は三波川帯、秩父帯に当り、さらに[1][3][5]は大きな構造線が断層として走り、[1][2][3][5]に含まれる7地域は破碎帯地すべり地帯に含まれる^{注5)}。

残る[4]は三波川帯、秩父帯に比して地すべりが発生しにくい四万十帯に属するが、四万十帯はさらに北帯と南帯に、あるいは、紀伊半島では日高川層群、音無川層群、牟婁層群に分かれる等、一様ではなく、四万十帯にあっても、三波川帯で発生する破碎帯地すべりがG十津川においては生じることが明らかにされている²⁸⁾。その結果、地図3に示されるようにF馬路は破碎帯地すべり地帯に含まれず、G十津川は破碎帯地すべり地帯に含まれている。実際、F馬路で地すべり被害は極めて少なく、一方、G十津川では過去にも大規模な地すべりが何度も発生し、特に明治22年（1889）の十津川災害では地すべりによって多くの被害がもたらされ、約2500人の住人が北海道へ

集団移住して新十津川村（現在の新十津川町）を作った程であった。以上の結果を表1の地すべり欄に示した。

従って、A~Iの9地域では、破碎帯地すべり地帯と傾斜地集落が見られる地域が重なることが指摘できる。地すべりが自然現象であり、集落形成が人為的所作であることを考慮すれば、地すべり地帯に傾斜地集落を形成し一列型間取りの家を建てて、人々が生活を営んだと言えるであろう。しかし、先に述べたように地すべり地帯は災害の危険度が高い。そこに住むからには危険を冒しても住むメリットがあったことが予想される。そのメリットとして以下の3点が挙げられる。

1) 急傾斜ではなく緩傾斜

平地と比較すれば急傾斜であるが、地すべり地形は図2、写真5に示すように、周囲の斜面に比べれば傾斜が緩やかな場所である。

2) 肥沃な土地

崩れ溜まるというプロセスによって土砂がすり潰され攪拌される。H上村を含む遠山郷では、こうしてすり潰され石から土を得ていたことが報告されている^{注6)}。結果として土が耕されたのと類似した効果を生み、地すべり地帯は肥沃な土地が多く、農産物にも恵まれている^{注7)}。

3) 水が豊富

地すべりは地下水に地盤が浮き上げられて起こるものであり、地すべり地帯は本来地下水が豊富である。しかも、土砂が攪拌されることにより柔らかい土となり、水が浸み出易くなっている。D仁淀〔宗津〕は、典型的な地すべり地形にある急傾斜地集落であるが水が豊富で水田が広がり、「そーず」という地名は全国で水の豊富な所に見られる^{16, 17)}。

5. 平地に住む近世、山に住む中世

前節で示した利点の故に、地すべりの危険がありながら人々は地すべり地帯に住んできたと言えよう。しかし、これらの利点は急峻な山間部の中では、という条件付きの話であり、平地に住むのに比べればとても利点とは言えない。なぜ平地に住まないのか、と言う疑問が次に生じる。

昔の生活とその景観として、現代人の多くは農業が営まれる農村を想起するであろう。萱葺きの農家があり、前に水田が広がり、後ろに里山が控える、と言った景観である。自然に恵まれた田園生活に見えるが、「自然」を定義通りに「文化」と対比する概念で捉えれば、自然な景観どころか、文化的な景観というのが正しい。その理由として以下の2点が挙げられる。

- 1) 自然のままであれば平地は雨が降れば水浸しとなり、日照りが続けば干上がり、水田として使えない。有効な水利システムという文化、文明に裏付けられて初めて水田が成り立つ。
- 2) 自然のままであれば武力のある集団が無防備な平地の集落を襲い、生活が脅かされる。暴力を禁じ治安を維持する文化的な制度が行き渡ることが平地の農村生活を保障する。

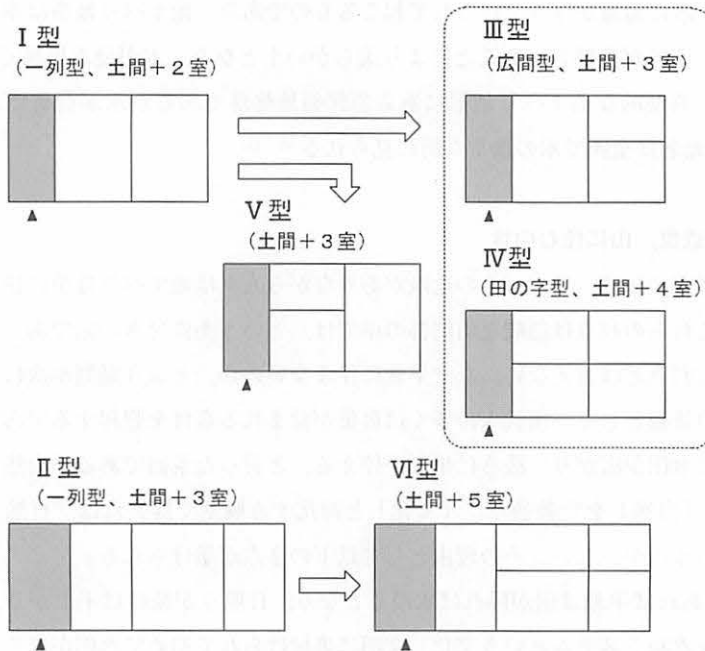
近世社会は人の力で、即ち文化としてこの両者を確立させた。江戸時代初期に各地で行われた新田開発は、雨に左右された土地に水利工事を施し、安定的に耕作が可能な水田と化したものである。それには幕藩体制の成立が必要であり、その体制によって治安の維持も可能となった。言い換えれ

ば、近世社会成立以前はこの2点が保証されず、自然のままに雨が降れば平地は水浸しとなり、平地の集落は武力のある集団に襲われたことになる。特に後者は戦国時代を含む中世社会に共通な現象であった。

例として、幕末の慶応2年(1866)に豊後日田(大分県日田市)の代官が領民に申渡した文書に中世社会を「乱世のありさま」として「軍兵は青田を刈り踏み荒らし、家々を「乱妨」(=らんぼう、略奪)し(中略)親兄弟も散り散りに、かの山に隠れ、この谷底に隠れ、木の実や茅の根を拾ってわずかに命をつなぎ、もう敵は去つただろうと村に立ち帰って」⁸⁾と表現している。中世に比べて安全な幕藩体制を宣伝する材料として、中世は乱世であったと言っていたわけであるが、山や谷は隠れ家として重要な意味を持っていたことがうかがえる。

従って、大雑把に言ってしまうと、中世においては平地に住むことが難しく、山地に住まざるを得ず、山地であれば有利なのは地すべり地形ということになる。従来は、近代以前のモデルとして農村を対象にした研究が主流で、山地の場合は農村モデルを山という環境に対応させたバリエーションとして論じる傾向があったが、順序は逆で、山での生活がどのように平地に適応されていったかを検討するのが適切な方法であろう。

図3 民家の間取り発展模式図



同様のことは、民家の間取りについても指摘できる。図3に、図1に示した民家間取りの中から、E一宇の下木家のように土間と2室とからなる一列型の間取りをI型として、また、C椎葉の清田家のように土間と3室とからなる一列型で、3室の内中央が最も大きい部屋である間取りをII型として模式的に描いた。また、全国に広く見られる広間型、田の字型間取りをそれぞれIII型、IV型として同様に描いた。細長い敷地しか得られない傾斜地では、全国に広く見られる広間型(III型)、

田の字型（Ⅳ型）の平面が地形に合わせて一列型（Ⅰ型、Ⅱ型）となったと考えるのではなく、一列型から広間型、田の字型が発生していった可能性が考えられ、これを示唆する研究成果として次の2点が挙げられる。

第1は四国の山中に見られる一列型2室型間取りと3間取りとの関係である。四国の山中には一列型2室型間取りとして図3のⅠ型が見られるが、3間取りには、Ⅰ型の2室の内上手の部屋が前後に分かれた形の、全国に広く見られる広間型3間取り（Ⅲ型）と、これとは逆に、Ⅰ型の2室の内下手の部屋が前後に分かれた形の3間取り（Ⅴ型）とが共に見られる^{22~25)}。Ⅴ型は全国的に見ても四国の山中に特徴的に見られ、下木家においても図1に示すように下手の部屋に独立柱があって前後に二分されてゆく素地が認められ、広間型（Ⅲ型）ではない3間取り（Ⅴ型）へ発展する形と言える。従って、広間型（Ⅲ型）が山間地の細長い敷地に合わせてⅠ型となったと考えるより、Ⅰ型から分岐してⅤ型、および、Ⅲ型、Ⅳ型へ発展したと考えるのが妥当であろう。

第2は大きな部屋の位置である。有路家（山形県、重要文化財）等に見られる、5間取りで横方向に3列に並ぶ部屋群の内中央の列の幅がいちばん大きい間取りを図5でⅥ型として示した。一方、山中に見られる一列型3室住宅（Ⅱ型）では、3室の内中央の大きな部屋が行事に用いられる例が多い。両者の関係については中央の部屋がいちばん大きい間取りが「近畿地方の古い農家や（中略）古い社会習俗を維持した山村の農家で発見される」⁵⁾、「正面から見て三部屋が並ぶうちの中央の部屋がいちばん大きいという間取りは、注意してみると、右にあげた地域（＝四国山地、椎葉村）以外の日本各地の年代の古い大規模な民家に発見できる」⁵⁾と指摘され、Ⅱ型がより原始的な形であったことがうかがえる。

以上のような考察を踏まえれば、傾斜地集落や一列型間取りに生活原形を求めたこれまでの研究視点は有効であったと言えよう。では、中世の山の生活はどのようなものであったか、とりわけ、平地の水田ではない農業生産手段が必要であったはずであるがそれは何か問題となる。

6. 焼畑：「山にする」

中世の農業生産手段は焼畑に代表され、調査した傾斜地集落のある8地域ではすべて昭和30年頃まで行われていた。「焼畑」は、山地の木を伐採して火入れをして灰とし、それを肥料として畑作農地として用い、数年間作物を栽培した後に農地を一定期間放置して地力を回復させ、別の山地を同様に農地とするものである。放置された土地は、自然の遷移によって土力を回復して山林に戻る。何度か農地を移動させていくため、移動農法とも言われるが、何度か移動した後、土力を回復した山林に再度火入れをして農地とする循環的な農法である。このように農業であると同時に林業でもあるという性格を持ち、山地の環境に適した農法であったと言えよう。

類似した名称である「切替畑」もしくは「切畑」は、山林と農地を切り替えて輪作するという意味で焼畑と共通するが、必ずしも火入れをしない。一方、火入れをしないものを「林田」ともいう⁵²⁾。

他の農業、林業の方法と比較するため、平地の田畑、人工林による林業、焼畑の特徴を時間、空

表2 焼畑の特徴

	平地の田畑	人工林による林業	焼畑
1サイクルの時間	作付から収穫まで1年	植林から伐採まで数十年	ある場所に火入れしてから、その場所を次に火入れするまで数年×数カ所=数十年
空間	自作の農地	私有林	焼畑農地数カ所
作業	集約的		疎放的

間を指標として表2にまとめた。平地の田畑では種まきから収穫まで1年で1サイクルの耕作を行い毎年収穫する。耕作する空間は自作の農地であり、近世の本百姓が自分の田畑を耕作する形がこれに当る。人工林による林業では、植林してから材木になるまで数十年が必要で、ほぼ人の一世代のサイクルである。植林地は、藩有林や国有林でない私有林の場合は、これも平地の農地と同様に私有林である。共に、限定された土地に集約的に労働力を投下する方法である。

これに対し、焼畑の場合は、火入れをして農地として数年使い、その後数カ所に農地を移動してから戻り、再度火入れをして農地とするまでが1サイクルであり、数年×数カ所=数十年を要する^{注8)}。平地の田畑に比べて遙かに長く、人工林による林業とはほぼ同程度の時間である。また、空間的には、火入れをして農地として使える広さの土地が数カ所必要となり、平地の田畑に比べても、さらに人工林に比べても広い。焼畑の生産様式は平地の田畑や人工林による林業に比べて、時間的には生産の1サイクルが長く、生産や労働の単位も空間的に広い点が特徴である。一方、平地の田畑や人工林が労働集約的な作業で維持されていたのと比べて、焼畑の場合は自然が持つ回復力を組み入れて疎放的な労働を行っていたことが指摘される。こうした焼畑を行っていた人々の生活観はどのようなものであったか、については今回の調査では明確な答を得るに至っていないが、以下のヒアリング結果は興味深い。

I大滝で焼畑を経験した方から、ひとつの焼畑農地での耕作を終了して別の山林に火を入れる時、耕作を終了した農地を放置することを「山にする」と言うことをうかがった。「山がある」のではなく「山にする」のであるから、何故「山がある」のかという疑問は無意味となる。焼畑のサイクルに従って「山にする」と山になるだけのことである。

ところで、既報¹⁻³⁾で、A五木、B五家荘、C椎葉、E一字、F馬路、G十津川の6地域において、近世初頭には著しい土地の寡占状態が見られ、「名子」「間人」等と呼ばれる隷属的な小作層が多数存在する支配構造であったことを示した。F仁淀（四国地方）では、近世初頭の『長宗我部検地帳』²⁶⁾では少数の名主と多数の下人、名子、被官等の隷属農民とが記されている²²⁾。I大滝では、慶長3年（1598）の「武州秩父郡大滝日陰之郷年貢帳」⁴⁴⁾によれば、耕作者数160人の内57%に当る92人が屋敷の所有者としては登録されていないことが明らかにされ⁴⁵⁾、同様の寡占状態であったことがうかがえる。

徳川幕府による体制が確立した後のこれら9地域の状況を見ると、B五家荘、G十津川、H上村、I大滝は天領に、A五木は人吉藩領に、C椎葉は天領から人吉藩領に、E一字は徳島藩領に、F馬

路とD仁淀は土佐藩領になり、形式的には藩制秩序に組み込まれた形となったが、藩政期に入ってもA五木、B五家荘、C椎葉、E一字、G十津川では中世的な土豪勢力が温存されていた¹⁻³⁾。

近世社会は水田耕作による生産を基礎とし、自立した百姓が検地によって確定された水田の年貢を納めることを原則としていた。しかし、広範囲に長期的に農地と山地とを切り替えながら循環型の耕作を行う焼畑ではこうした方法は不可能である。この意味で、調査した傾斜地集落で焼畑が多く残っていたことは、名子等の隷属民を従えた土豪的な大規模土地所有が遺っていたこと符合し、林田経営が中世的な土地所有成立の前提であったと指摘されている⁵²⁾ ことと矛盾しない。

7. 近代の平地の生活

本研究の助成を申請したのは2010年秋であり、2011年3月に東日本大震災が発生して大きな被害を出すことは予想出来なかった。従って、地殻と生活という本稿のテーマが、地震—地殻、および、被害—生活と対応しているのは全くの偶然である。この震災を契機として、原子力政策をはじめとして従来の様々な方針を見直す必要が生じているが、中でも震災で明らかになった長周期地震動、液状化現象の2点は本稿と関連が深い。

長周期地震動は関東平野等の沖積平野の柔らかい地盤が、地震によってゆっくり長周期で揺れることを指す。高層ビルは従来の低層建物に比して固有周期が長く、長周期地震動と共振して大きな被害を出す恐れが指摘されている。液状化現象は、地震時に地下水位の高い砂地盤が振動により液体状になる現象で三角州、埋立地、旧河川跡等で発生する。

長周期地震動、液状化現象が発生する場所はいずれも都市化が進んでいる人口密集地域に重なり、このことは東日本大震災でも改めて確認された。別の見方をすれば、人が山地から平地に生活の中心を移し、近代化を進めて田や池を埋め立て、高密度化を進めて高層化を図ってきたことによる当然の帰結と言えよう。古絵図を基にかつて沼、池、川であった個所を表示する作業を開始した自治体があるのも、こうした変化の中で置き去りにされた大切な情報を得る必要があるとの判断からであろう。山地から平地に活動の中心を移し、新田開発等を盛んに行ってからは約400年経つ。

本文中第5節に、幕末に豊後日田代官が領民に中世社会を「乱世のありさま」と申渡したことを記した。中世の乱世はこの申渡しの300年程前の状況であるが、このような申渡しが行われたところを見ると、少なくとも幕末の人は300年程前の中世の乱世にかなりのリアリティを感じていたと推測される。

日本では第二次大戦中に国民に金属類を供出させたが、H上村でも農作業に使う鍋釜類を供出させられそうになったことをヒアリングでうかがった。家の近所に隠したのではすぐに見つけられてしまい、山の複雑な襲の中に隠すことで地形に詳しくない外部の人の目を逃れ供出を免れた、という話であった。中世に「乱妨 (=略奪)」から「かの山に隠れ、この谷底に隠れ」たのと同様の世界は、幕末どころか第二次大戦中にまで生きていたと思われ、本研究に今日的な意味を見出そうとすれば、東日本大震災は大きな契機になり得るのではないかと考える。

8. 結び：中世から古代へ、日本から世界へ

全国でわずか9例の事例を基に地殻から生活までを説明しようという目的でスタートした研究であったが、地殻→地質→地すべり地形→生活空間という繋がりが、日本列島を貫く形でおぼろげながらイメージ出来たのではないだろうか。

近世の水田から中世の焼畑へと時代を遡ると、次に、古代ではどのような農業生産手段とそれに基づく社会システムが採られ、古代の生活空間、生活環境はどのようであったか、という疑問に到達する。古代には、当初、班田收受法と言われる国家が土地を個人に与え、年貢を取り、死ねば国家に戻すという方法を採用した。近畿地方等に今も見られる条里制がその土地制度を具体的に示している⁶⁾。その後、これが崩れて荘園制となるが、この古代から中世へはどのように変化したのか。

また、焼畑は日本のみでなく世界に広く見られる。同様に山間の耕地である段々畑、あるいは、棚田といった景観も世界に広く見られ、バリ島では観光ツアーに組み込まれている。日本の焼畑、棚田、段々畑と地球上の他の地域のそれとはどのような関係にあるのか。

以上の2点は、本研究で対象とした日本の中世から近世に時間的、空間的に連続したテーマであり、今後考察を深めて行きたい。

謝辞

本研究を行うに当り、共立女子学園山森芳郎名誉教授のご教示を得、挿図の浄書に共立女子短期大学海沼千尋助手の協力を得た。深く感謝したい。また、史料の面では、既報¹⁻³⁾で挙げた他に以下の方々（敬称略）の協力を得た。付記して謝意を表したい。

仁淀川町教育委員会、農林水産省中国四国農政局高瀬農地保全事業所、飯田市上村自治振興センター、飯田市立中央図書館、秩父市大滝総合支所、大野敏光、藤元栄一、山崎雄一、大倉和幸、福岡茂巳、野牧広、胡桃沢ちさ子、成沢徳一、山中秀人、千島茂

注

注1) A～Hの現在の行政区分は以下の通りである。A五木：熊本県球磨郡五木村、B五家荘：熊本県八代市泉町、C椎葉：宮崎県東臼杵郡椎葉村、D仁淀：高知県吾川郡仁淀川町、E一字：徳島県美馬郡つるぎ町、F馬路：高知県安芸郡馬路村、G十津川：奈良県吉野郡十津川村、H上村：長野県飯田市、I大滝：埼玉県秩父市

注2) A五木〔出羽〕宮原家平面図は文献18に、B五家荘〔仁田尾〕篠原家平面図は文献19によった。C椎葉〔不土野〕清田家は宮崎県総合博物館民家園へ移築保存され、平面図は同館ホームページ掲載の図面によった。D仁淀には旧仁淀村に隣接する旧葉山村白石の市川家平面図（文献25）を載せた。E一字〔木地屋〕下木家は四国民家博物館へ移築保存され、平面図、配置図は文献22によった。G十津川〔出谷小壁〕千葉家平面図、および、〔上湯川大檜喰〕千葉家配置図は文献29によった。H上村には旧上村に隣接する旧大鹿村の山稼の家の平面図（文献30）を載せた。I大滝〔十々六木〕木村家は滝沢ダムに水没し、平面図は文献44によった。

注3) 地図2は吉松敏隆「地域区分と境界断層」（株）クボタ〔URBAN KUBOTA〕38号、1999所収）中の

「西南日本における先中新世の地帯区分」を描き直したものである。

- 注4) 地図3の地すべり地帯の分布図はNPO 法人砂防広報センターホームページ「地すべりの種類別発生個所」図を描き直したものである。
- 注5) 熊本県内には「中央部を東西に横断する中央構造線に沿った破碎帯地すべり、天草諸島を中心に分布する第三期層地すべり、阿蘇山を中心とした温泉地すべり」²⁰⁾が存在し、破碎帯地すべり地帯に特有な蛇紋岩メランジュと中央構造線との関係について、中央構造線の「南部の蛇紋岩メランジュ分布域とその周辺では地すべり地形が明瞭で」²⁰⁾あることが指摘されている。地図3では熊本県内には第三期層地すべりの分布域が広く描かれているが、第三期層地すべりは天草が中心であり、A五木、B五家荘のある南東部山地では、表1地質欄に見られるように、仏像構造線に沿った破碎帯地すべりが中心であったと考えられる。C椎葉についても同様である。
- 注6) 遠山郷では「耕作には刃先の鋭い山楾を用い、母岩を砕いては耕土化する努力がなされている」⁴⁰⁾とされている。「遠山郷」は天竜川に注ぐ遠山川流域の村々の総称で、藩政期の上村、木沢村、八重河内村、和田村、満島村、鶯巣村に該当する。文献31、36、37の標題に見られる「遠山」「遠山谷」も同義である。
- 注7) 「遠山郷で栽培されている馬鈴薯は在来種で二度芋と呼ばれている。(中略) 標高1000mの下栗の半場地戸では、粘板岩が風化した赤土が厚く堆積しており、品質のすぐれた二度芋が獲れるので、下栗芋とも呼ばれている」⁴⁰⁾とされている。また、新潟は米どころとして有名であるが、代表銘柄こしひかりでは新潟平野産よりも山間部の魚沼産がブランド米として知られ、地図3に示すように魚沼地方は第三紀層地すべり地帯である。
- 注8) 具体的な年数については、C椎葉で取材したNHKスペシャル「クニ子おば婆と不思議の森」(2011年9月25日NHK総合テレビ放送)では、農地として4年使用し、30年周期で一巡すると報じられている。また、林田の場合は1個所で農地として10年間使用できる⁵²⁾とされる。

参考文献

・・・既報・・・

- 1) 山森芳郎、児玉好信、岡田悟、三枝映子『生活様式・生活意識・生活環境から見た生活原景の変容に関する調査研究』科研費報告書、2008
- 2) 山森芳郎、児玉好信、岡田悟「近代日本における生活原景の変容に関する研究」共立女子大学総合文化研究所紀要第13号、2007
- 3) 山森芳郎、岡田悟「山間集落群の空間特質の変遷について—五木、五家荘、椎葉、一字、馬路—」共立女子大学総合文化研究所紀要第14号、2008
・・・全国の民家、生活空間に関するもの・・・
- 4) 大岡敏昭『藩制と民家—藩境域からみた民家の成立と発展—』相模書房、1990
- 5) 大河直躬『住まいの人類学 日本庶民住宅再考』平凡社、1986
- 6) 山森芳郎『日本の田園風景』古今書院、2012
- 7) 山森芳郎「近江湖東平野における糸里空間について—農耕空間の史的形成過程に関する研究(その1)—」日本建築学会計画系論文報告集第429号、1991
- 8) 坂田聡、榎原雅治、稲葉維陽『日本の中世12 村の戦争と平和』中央公論新社、2002
・・・地質に関するもの・・・
- 9) 『近畿地方土地質図』(財)国土開発技術研究センター、2003
- 10) 地質調査所(監修)『日本地質図体系 九州地方』朝倉書店、1995
- 11) 地質調査所(監修)『日本地質図体系 中国・四国地方』朝倉書店、1991

- 12) 地質調査所 (監修)『日本地質図体系 近畿地方』朝倉書店, 1996
- 13) 地質調査所 (監修)『日本地質図体系 関東地方』朝倉書店, 1990
・・・地すべりに関するもの・・・
- 14) 『天界集落の煌き』農林水産省中国四国農政局高瀬農地保全事業所, 2008
- 15) 藤田崇 (編著)『地すべりと地質学』古今書院, 2002
- 16) 小川豊『危険地帯がわかる地名』山海堂, 1983
- 17) 小川豊『地名の語源が意味する地すべり危険地帯』山海堂, 1998
・・・九州地方に関するもの・・・
- 18) 北野隆『五木地方の民家について』日本建築学会中国・四国支部研究報告第6号, 1984
- 19) 『五家荘の民俗』熊本県教育委員会, 1974 (第4章住居執筆:北野隆)
- 20) 『熊本県地域防災計画 (震災対策編)』熊本県防災会議, 2008
- 21) 齋藤眞ほか『5万分の1地質図幅「砥用」—日本列島の縮図, 149の凡例が示すもの—』『地質ニュース』619号, 産業技術総合研究所地質調査総合センター (編), 2006
・・・四国地方に関するもの・・・
- 22) 四国民家博物館, 宮沢智士 (共著)『旧下木家住宅の移築工事記録』四国民家博物館, 1981
- 23) 白木小三郎『四国山間部の民家』『建築雑誌』昭和41年1月号, 日本建築学会, 1966
- 24) 『重要文化財 山中家住宅修理工事報告書 (高知県)』山中家住宅修理委員会, 1978
- 25) 『土佐の民家』(主任調査員:林野全孝)高知県教育委員会, 1972
- 26) 『長宗我部検地帳』(全19冊)高知県立図書館, 1957~65
- 27) 『仁淀村史』仁淀村, 1969
・・・近畿地方に関するもの・・・
- 28) 藤田崇ほか『紀伊四万十帯にみられる地すべりの地質構造規制』『地質構造』第31号, 構造地質研究会, 1985
- 29) 奈良県教育委員会 (編)『十津川』十津川村, 1961
・・・中部地方に関するもの・・・
- 30) 下伊那教育会 (編)『下伊那の地誌 大鹿地方』山村書院, 1938
- 31) 池田寿一『遠山紀行』秀文社, 1966
- 32) 『上村史 自然編』上村史刊行委員会, 2008
- 33) 『上村史 歴史編』上村史刊行委員会, 2008
- 34) 『上村史 特集編 上』上村史刊行委員会, 2009
- 35) 『長野県民俗資料調査報告第8 大鹿村の民家』長野県教育委員会, 1966
- 36) 『遠山谷北部の民俗』飯田市美術博物館, 2009
- 37) 『遠山谷の民俗』上村民俗誌刊行会, 1977
- 38) 吉田靖『長野県の民家』『建築雑誌』昭和41年1月号, 日本建築学会, 1966
- 39) 緑草会 (編)『民家図輯 第12輯 長野県』大塚巧藝社, 1931
- 40) 市川健夫『風土発見の旅』古今書院, 1995
・・・関東地方に関するもの・・・
- 41) 小林茂『秩父 山の生活文化』言叢社, 2009
- 42) 小林茂『秩父 山の民俗考古』言叢社, 2010
- 43) 『秩父滝沢ダム水没地域総合調査報告書 上巻』滝沢ダム水没地域総合調査会, 1994
- 44) 『秩父滝沢ダム水没地域総合調査報告書 下巻』滝沢ダム水没地域総合調査会, 1994
- 45) 『大滝村誌 上巻』秩父市, 2011

- 46) 『大滝村誌 下巻』秩父市, 2011
- 47) 『埼玉県の民家』埼玉県教育委員会, 1973
- 48) 緑草会(編)『民家図輯 第6輯 埼玉県』大塚巧藝社, 1931
- 49) 志野昭『秩父山地農民の生活』有峰書店新社, 1983
 ・ ・ ・ 焼畑, 林田に関するもの ・ ・ ・
- 50) 佐藤洋一郎(監修)『焼畑の環境学—いま焼畑とは』思文閣出版, 2011
- 51) 松本繁樹『山地・河川の自然と文化 赤石山地の焼畑文化と東海型河川の洪水』原書房, 2004
- 52) 畑井弘『律令・荘園制度と農民の研究—焼畑・林田農業と家地経営』吉川弘文館, 1981

写真1 D仁淀〔高杭〕〔松尾〕の集落景観



写真2 I大滝〔麻生〕〔栃本〕の集落景観



地図1 本稿で対象とした9地域の分布

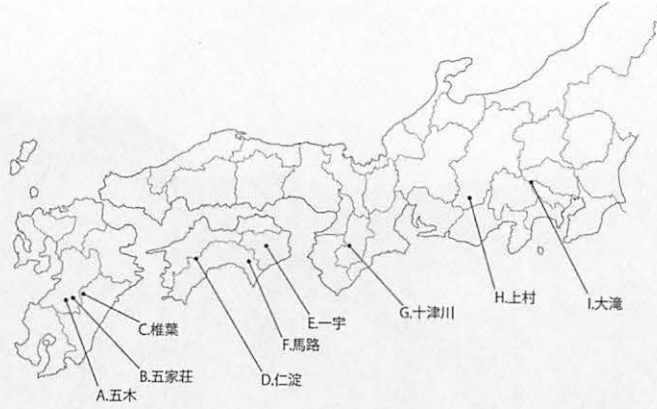


図1 本稿で対象とした9地域の一列型住宅平面図、敷地配置図の例

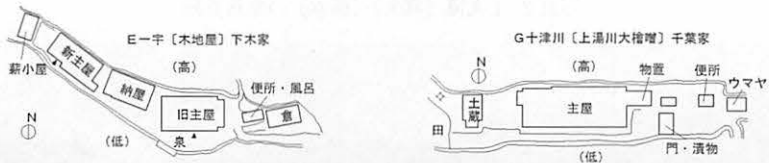
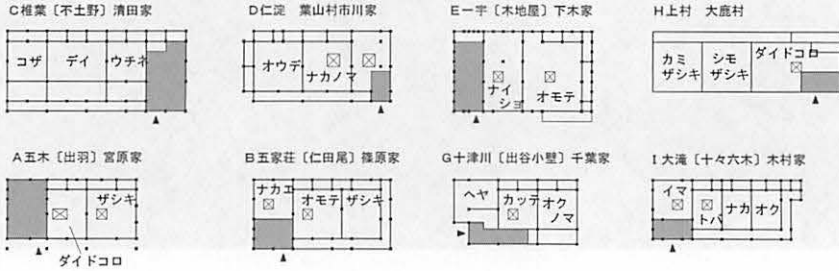
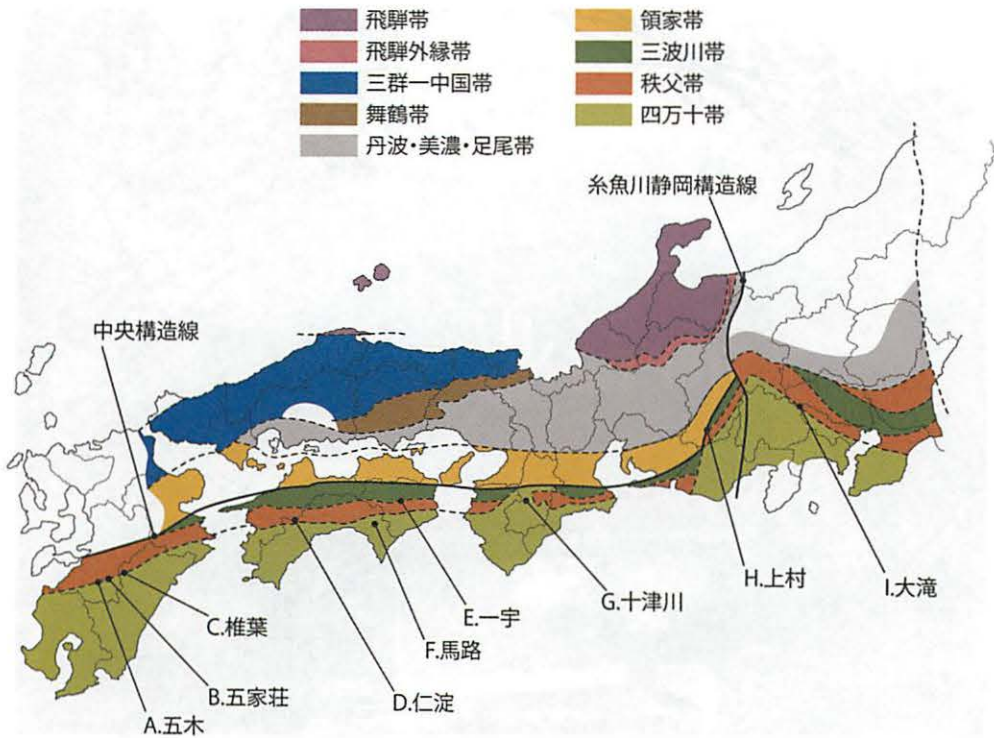


写真3 D仁淀〔寺村〕での住宅敷地の様子



地図2 西日本の地質構造図



地図3 西日本の地質構造図, 地すべり地帯の分布

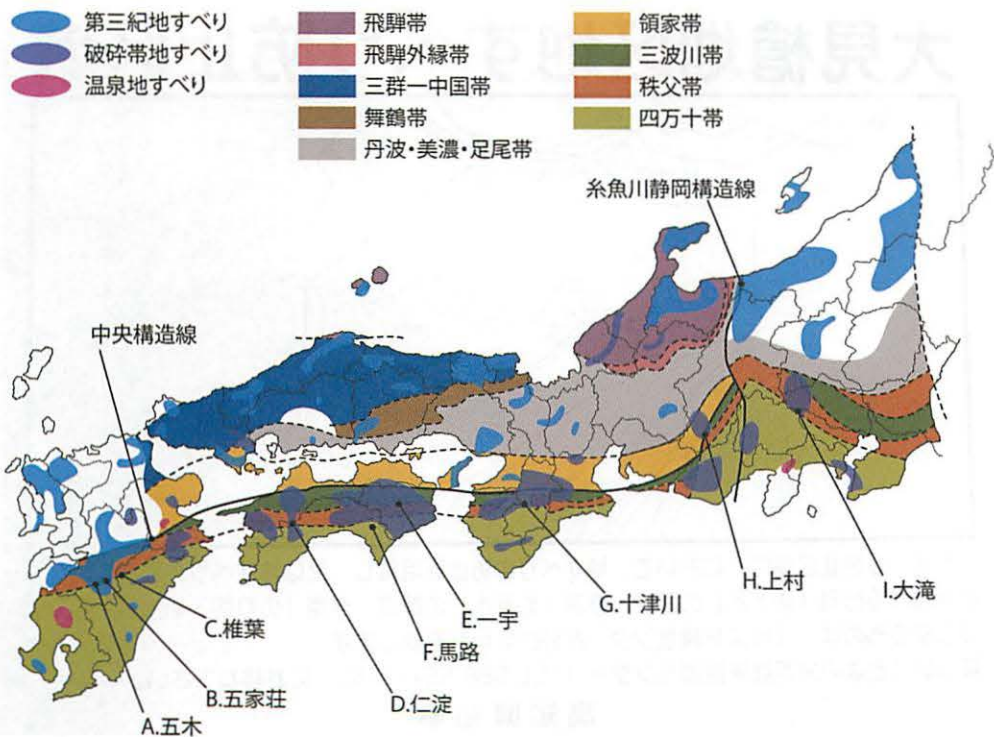


写真4 D仁淀大渡ダムの看板



写真5 D仁淀〔大見槍〕の掲示

大見槍地区地すべり防止区域

「地すべり防止区域内」において、地すべりの防止を阻害し、又は地すべりの助長、若しくは誘発する行為「地下水」の誘致・停滞「地表水」の放流・停滞「のり切・切土等」をしようとするものは、「農業振興センター所長の許可」を要します。
詳しいことは中央西農業振興センター（TEL 088-852-7266）にお尋ね下さい。

高知県知事